

「こどもバンド」の活動報告

－特徴ある音楽アンサンブルの起こり，発展，可能性－

鶴巻 保子，木原 英子

A Report on the Practice of KODOMO Band
The Genesis, Development and Potential of a Unique Musical Activity

Yasuko Tsurumaki and Hideko Kihara

「こどもバンド」とは、将来保育現場で器楽合奏などの音楽指導の実践力をつけるために、こども学専攻の学生が、器楽アンサンブルを中心として音楽を楽しむunique¹⁾な課外活動のグループである。

平成14年、保育士養成課程として鹿児島純心女子短期大学生活学科に「こども学専攻」が開設され、本学で初めて音楽の授業が開講した。保育の音楽を教え、学生が短い修養年限で音楽体験するには、授業の枠内だけでは限界があると感じた筆者（木原）の発案によって「こどもバンド」が結成された。当初は、20名程度の有志で活動がスタートし、11年目になる現在、メンバーは110名となり、演奏の場は学内から徐々に地域へも広がった。保育士養成課程の必修科目である音楽を補うものとして発足した「こどもバンド」の趣旨や活動について筆者（鶴巻）は、確認し見直す必要があると感じた。

本稿は「こどもバンド」の由来と活動の経過を報告するとともに、学生のアンケート調査を通して「こどもバンド」における学生の学びについて検討し、その成果を考察するものである。

Key Words: [課外活動] [器楽アンサンブル] [実践力] [自主性] [学び合う]

(Received September 24, 2013)

はじめに

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻では、課外として、器楽合奏を中心とした「こどもバンド」の活動を行っている。保育士養成課程として本学にこども学専攻が開設された平成14（2002）年に早速「こどもバンド」が結成された。以来、学生が主体的に取り組む器楽合奏の活動として継続されてきた。楽器編成は主に保育で使用する簡易な楽器で、子どもの歌を中心に創意工夫を凝らし、「純大祭」の舞台発表を目指すことから始まった。発足当初は、20

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

名程度であった「こどもバンド」のメンバーは現在110名に膨らみ、次第に地域にも知られるようになり、保育現場や施設より「こどもバンド」の演奏依頼を受けるようになった。

幼稚園教諭や保育士として子どもと触れ合う場では、音楽あそび、歌唱、器楽指導の他、年間を通した園の行事で音楽活動とその指導が行われる。だが、保育者²⁾を目指して入学してくる学生たちの中には、音楽の楽しみを知らず、苦手意識を持っている者も少なくない。保育士養成課程の改正³⁾における「保育の表現技術」では、子どもの成長、表現の育ちに合わせ、子どもの様々な音楽活動を展開できる指導力が求められている。そのために音楽表現の技能向上を図るためだけでなく、学生自身が音楽に親しみ、音楽を楽しむこと、子どもの表現を育み、子どもとともに成長する保育者育成の取り組みが必要となっている。

本稿は、第1に「こどもバンド」の由来（平成14年度～18年度）、次に「こどもバンド」の概要として、活動内容と経過（平成19年度～現在）を報告し、最後に学生の「こどもバンド」への参加についてのアンケート結果を検討し、「こどもバンド」の活動における成果と課題について報告するものである。

I. 「こどもバンド」の始まり

1. 「こどものバンド」の誕生

「こどもバンド」が産声を上げたのは、平成14年4月であった。その春、生活学科こども学専攻が開設され、第1期生37名が希望を胸に入学した。筆者は、必修科目である音楽Ⅰ（歌唱）、音楽Ⅱ（ピアノ技法）及び選択科目音楽Ⅲ（楽典）⁴⁾を担当した。新年度に着任したばかりの筆者は、初代主任の平山久美子教授（現学長）に音楽室を案内され、幼児用に作られた楽器の数々、すず、カスタネット、タンバリン、木琴、鉄琴、大太鼓、小太鼓など用意されていたのを初めて見た。残念ながら「こども学専攻」のカリキュラムには、これらの楽器を使用する授業がなかったが、筆者は卒業後保育士として現場に赴く学生たちには、子どもたちに器楽合奏の指導をする時が来るに違いないと考えていた。これらの子どもサイズの楽器を学生たちに弾かせてみたらどうだろう。そして実際に演奏し、合奏を経験する機会を持てはどうだろう。そうした考えが希望者を対象とした課外活動としての「器楽アンサンブルの時間」へと発展していった。「思い立ったら即行動」が信条であったため、すぐさま関係部署に相談し、掲示板にメンバー募集の文書を掲げた。初顔合わせの日、予定の時刻に集まった学生は20名に満たなかったように記憶している。まず活動の趣旨を説明し、皆で話し合いながらそれぞれの担当楽器を決めた。このようにして「こどもバンド」は誕生したのである。

2. 楽器編成とレパートリー

誕生当時、楽器編成は表1のようなものであった。

表1 「こどもバンド」最初の楽器編成

打楽器	すず、カスタネット、タンバリン、トライアングル、シンバル、木琴、鉄琴、小太鼓、大太鼓
鍵盤楽器	鍵盤ハーモニカ、アコーディオン、電子ピアノ、ピアノ

これには、保育園における合奏指導の実態も考慮されていた。保育園には0歳から6歳と幅広い年齢の子どもたちが在籍している。合奏指導においては、未満児ではピアノ演奏に合わせてずずやカスタネット等を持つてのリズム打ちをするのが基本となる。年齢が上がるにつれて鍵盤ハーモニカやシンセサイザーなどを導入し、最終学年までに大太鼓や小太鼓、鉄琴や木琴といった演奏が難しい楽器などを総合した大合奏へと発展させていく。「こどもバンド」では、学生たちが合奏を楽しむだけではなく、将来保育士として器楽合奏を指導する立場になった時、参考となるような経験を積むことも盛り込みたいと考えていた。

同時に準備として、楽器店の書籍コーナーで器楽合奏用の楽譜を片端から調べ、演奏可能と思われるものを何曲かピックアップした。市販されている合奏用の楽譜は殆どが小学生向きの楽器編成の為のものであった。そこでまず何曲かを「こどもバンド」の楽器編成に適した形に直すといった作業をした。電子ピアノとピアノを導入したのは、合奏として音に厚みを持たせるためであった。初めての練習では「かっこうワルツ」や「クシコスの郵便馬車」といったスタンダードな名曲に挑戦してみた。学生たちは忙しく、皆が集まる時間を見つけるのに苦労した。やむを得ず週一回、朝8時15分に集合して練習することになった。自分の楽器に慣れ、皆で合わせることに慣れてくると、合奏の楽しさを誰もが実感するようになった。そうして2ヶ月ほど経つと何曲かのレパートリーが出来上がってきた。

3. 「純大祭」への出演と「ちゃバン」の命名

鹿児島純心女子短期大学では毎年10月「純大祭」と銘打った大学祭が開催される。それに先立ち、「こども学」専攻スタッフによるミーティングにおいて舞台発表での演目について話し合われた。音楽担当として出席していた筆者は、その場で平山教授から「こどもバンド」に出演してもらえないか、という打診を受けた。「こどもバンド」にとって発表の機会が持てるということは、願ってもない話であった。すぐさま「純大祭」発表へ向けての準備が始まった。こども学専攻ミーティングでリーダー2名が選出された。また正式名称は話し合いの結果、「こどもバンド」のメンバーの一人が考案した「ちゃバン」（ちゃいるどバンドの略）」という名が採用された。

前期単位認定試験終了後、指導者（兼顧問）の筆者とリーダー2名の3名で企画会議をした。衣装のデザイン、舞台構成、曲目など、決めるべき項目が沢山あった。初めてのことで手探りの状態であったが、歴史のないところに最初の一步を踏み出すという喜びがあった。決定事項を伝達するや否やメンバー全員の気持ちが一気に盛り上がり、本番へ向けての準備がスタートした。「純大祭」初出場時のプログラムは表2のようなものであった。

表2 「純大祭」最初の舞台発表演奏のプログラム

No.	曲 名	備 考
1	クシコスの郵便馬車	ネッケ作曲
2	さんぽ	トトロ
3	ジャンケンぴょん	ミニモニ。
4	波乗りジョニー	サザンオールスターズ

「こどもバンド」が始動した当初はスタンダードナンバーを練習していたが、ステージに華やかさを添え、幼児用楽器を使用しつつも楽曲として聴衆が楽しめるよう工夫した。さらに、試みとして指揮を学生に任せてみることにした。後にそれは、メンバーの中から一曲につき一人ずつ指揮者を任命するという方法に発展した。そして迎えた「純大祭」舞台発表は、予想以上の出来ばえであったと自負している。

鹿児島純心女子短期大学に新たに仲間入りした「こども学専攻」が「純大祭」に巻き起こした新しい風。舞台発表の楽しい音楽の時間は、「未来は子どもの手の中に…WE LOVE KIDS AND MUSIC！」と高らかに宣言されて幕を下ろした。

4. 「学内クリスマス会」への出演

「純大祭」終了後も練習を続けていた「こどもバンド」であったが、せめてもう一度発表の機会が持てないかと思案していた。そこで思いついたのが「学内クリスマス会」への出演であった。「学内クリスマス会」でのステージ発表は、マレーシア留学生が参加したり、学生有志が得意なものを披露したりと変則的なものであり、時間も全体としては短いものであった。当時の学生会顧問、濱崎千鶴准教授にかけあって、準備を含めて「15分」という枠を獲得した。クリスマスに相応しい曲を集めてプログラムを作り、早速発表へ向けての練習を開始した。学生たちのアイディアで全員が赤いサンタクロースのコスチュームに身を包み、雰囲気も上々であった。「ジングル・ベル」という曲ではすずを聴衆の希望者に配り、演奏に参加してもらった。演奏前に、当時すず担当だったメンバーが「すず演奏講座」を催し、持ち方や鳴らし方を指導するという一幕もあった。聴衆参加型のステージは、レクリエーションとしても楽しめるものとなった。

5. 第二年目 第2期生を迎えて

平成15年、こども学専攻には待望の第2期生45名が入学した。「こどもバンド」新メンバーの募集も順調であった。何よりの収穫は、前年度の「純大祭」を見学に来ていた当時の高校3年生数名がその年「こども学専攻」に入学してきたことであった。その内何名かが『「こどもバンド」のステージ観ました。私たちも参加したいです』と言って、初ミーティングに来た。その内一人はマーチングバンド（主に幼稚園の行事でフォーメーションを作りながら演奏する鼓笛隊）に強い関心をもち、幼稚園に比べると数は少ないながらマーチングを実践している保育園に就職したい、という希望を持っていた。当然「こどもバンド」の練習をそのため訓練と捉え、積極的に参加した。もう一人は中学、高校時代ブラスバンド部でパーカッションを担当していた学生であった。スネアドラム特有の華麗なバチ捌きを子ども用の小太鼓で披露し、「こどもバンド」演奏の質を飛躍的に向上させた。

実は初年度の「こどもバンド」は何とか順調に運営されていたものの、次々と「これがあったら便利」と思われるものが浮上していた。増えていく楽譜を全員が保管するためのファイル、鉄琴と木琴を設置するためのスタンド等がそれである。あり合わせの物で代用していたが、存続できたら次年度にはもっと設備を整えようと考えていた。幸い楽器店からカタログを取り寄せ、バンドに役立ちそうな物を可能な限り購入しようと次年度の予算を組むことができた。そ

して鉄琴、木琴用のスタンド以外に、マラカスやクラベスといった新しい打楽器や最新版の楽譜なども揃えることができた。第1期生は先輩として新入生を牽引し、その年の「純大祭」企画ではリーダー始め、メンバーたちが主体性を発揮し、舞台発表はさらなる大成功をおさめた。

6. 「こどもバンド」の試練

その直後、大きな悲しみがこども学専攻全体を覆った。第2期生の学生一人が交通事故で亡くなった。あまりにも若すぎる悲劇的な死であった。突然学友を失った悲しみは残された全ての学生を打ちのめした。「こどもバンド」も演奏に対する意欲を失い、予定していたその年の「学内クリスマス」出演は無理かと思われた。それでも筆者はリハーサルを続け、出演を敢行した。「楽しい音じゃなくていい。泣いているような音だっていいんだ」そう言ってメンバーたちを励ました。その年のプログラムは陽気なクリスマス・メドレーではなく、ゴスペラーズの「永遠に」を選曲した。子ども用に作られた小さな楽器、大人にとっては玩具のような楽器の集まりであったが、心を込めて奏でる音楽を笑う人は誰もいなかった。「学内クリスマス会」当日、「こどもバンド」が演奏する「永遠に」は会場である体育館を優しく満たしていった。何よりメンバーたち自身も、音楽によって救いと慰めを得ていったのだと確信している。

7. その後

「純大祭」での発表は回を追う毎に充実しアイデアあふれるものへと発展していった。こうして平成14年度から18年度まで木原が顧問、指導に当たり、平成19年度より鶴巻が引き継ぎ、現在に至っている。

Ⅱ. 「こどもバンド」の概要

1. 「こどもバンド」の器楽合奏の意義

「こどもバンド」の独自性として、(1)将来、保育の現場で求められる音楽指導に対応できる実践力を培うため、学生が自主的に参加し学び合い、器楽アンサンブルを楽しむ課外活動であり、(2)使用楽器は主に子ども用の簡易な楽器による、とすることが挙げられる。

関間は、器楽の特性について次のように述べる。「音色の多様さ、音域の広さ、表現の多彩さによって、独自の表現力を持ち、他の活動では得られない音楽美の体験を可能にする。……楽器演奏の経験を通して楽器や楽器の音自体の魅力と新しい世界を発見し、音楽学習全体に生気を与える。……またアンサンブル学習による協同の活動は、協調の喜びを体験させ、社会性を育てる場となる。……さらに主体的な活動が必要とされることから、音楽的な実践力を育てる重要な場となる」⁵⁾。

また、保育者を目指す者が、簡易な楽器を自ら実践し、音色の楽しさを体験し、楽器の特徴を知ることが必要なのは、音楽やリズムに対する子どもの鋭敏な感性に気づき、子どもの創造性を豊かにするよう導くものとなるからである⁶⁾。「こどもバンド」は、指導者となる学生が、このような器楽合奏の特性や楽器の役割を体験的に学び、現場で子どもたちの成長のため実践できるよう、主体的に取り組む活動として重視しているのである。

2. メンバーの推移

本学が保育士養成校として開設した平成14年は、保育士資格取得、平成16年に幼稚園教諭二種免許課程認定を受け、幼稚園教諭の免許も取得可能となった。平成18年度に定員は30名から40名となり、平成22年度には定員は55名となった(表3)。

「こどもバンド」のメンバーを平成18年度から見ると、2年次は1年次より増加する傾向にある。これは、こども学専攻のカリキュラムは1年次の方が詰まっているため、2年次になり、ゆとりが出てから入部する者もいるためである。このような状況を背景に、「こどもバンド」のメンバーは年ごとに増え、平成20年度に60名を超え、平成25年度は、110名となった。

図1および表3は、「こどもバンド」が発足した平成14年の最初のメンバーを20名として、平成25年4月現在までのメンバーの推移を表したものである。平成15年度～16年度はデータを持ち合わせていないため未記入としている。平成17年度は全体で40名というデータによる。

表3 メンバーの推移

年度	定員 (人)	メンバー (人)			資格 免許
		1 年	2 年	合計	
14	30	20		20	保育士
15					
16					幼稚園教諭
17				40	
18	40	27	20	47	
19		15	37	52	
20		21	43	64	
21		42	34	76	
22	55	41	44	85	
23		46	41	87	
24		45	52	97	
25		64	46	110	

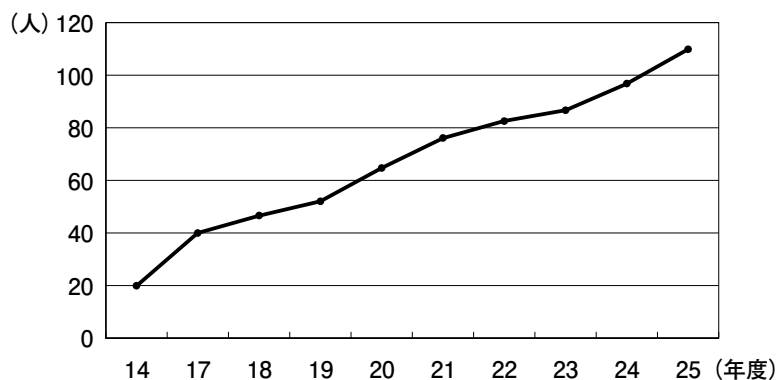


図1 メンバーの推移

3. 主な活動

「こどもバンド」の演奏は、第1期生より「純大祭」の舞台発表と「学内クリスマス会」(レクリエーション)での学内演奏が継承され、平成20年より「キャンパス見学会」⁷⁾のオープニングと「親子のお楽しみクリスマス会」⁸⁾の演奏が加わった。学外より平成19年に初めて訪問演奏の依頼を受けた。最初は、「こどもバンド」に所属していた卒業生の勤務先の池田(小児科)病院であった。次に鹿児島市親子つどいの広場、および学生の実習先の保育園、幼稚園などからであった。編成は大抵、20名～25名の依頼によるもので、有志が参加している。従って「純大祭」を始めとする学内での演奏のほかは、年ごとに学外から寄せられた依頼に参加させていただく活動となっている。これまでの「こどもバンド」の活動一覧を表4に示した。

表4 これまでの活動一覧⁹⁾

年度	学 内	学 外
14～ 18	純大祭 学内クリスマス会	
19	10/28 純大祭 12/22 学内クリスマス会	7/ 8 池田病院（小児科）「七夕コンサート」
20	6/12 キャンパス見学会 10/26 純大祭 12/ 6 親子のお楽しみクリスマス会 12/23 学内クリスマス会	7/13 池田病院「50周年記念式典祝賀会」 12/21 池田病院（小児科）「クリスマス会」
21	8/ 1 キャンパス見学会 10/25 純大祭 12/12 親子のお楽しみクリスマス会 12/23 学内クリスマス会	5/ 5 かごしまメルヘン館 「こどもの日メルヘン童謡コンサート」 12/ 6 鹿児島市親子つどいの広場 「なかまっちファミリーコンサート」 12/22 ライオンズクラブ「クリスマス家族会」 2/ 6 ひろき保育園「おひろめ会」
22	7/11 キャンパス見学会 10/24 純大祭 12/11 親子のお楽しみクリスマス会 12/23 学内クリスマス会	5/ 1 本学「創立50周年記念国民読書記念読書フェア」 5/ 5 かごしまメルヘン館 「こどもの日メルヘン童謡コンサート」 12/ 8 本学「創立50周年記念祝賀会」 12/12 鹿児島市親子つどいの広場 「なかまっちファミリーコンサート」 2/16 伊敷幼稚園「開園記念コンサート」
23	7/10 キャンパス見学会 10/23 純大祭 12/10 親子のお楽しみクリスマス会 12/23 学内クリスマス会	5/ 5 かごしまメルヘン館 「こどもの日メルヘン童謡コンサート」 12/11 鹿児島市親子つどいの広場 「なかまっちファミリーコンサート」
24	7/15 キャンパス見学会 10/28 純大祭 12/ 1 親子のお楽しみクリスマス会 12/22 学内クリスマス会	5/ 5 かごしまメルヘン館 「こどもの日メルヘン童謡コンサート」 11/16 八幡幼稚園「お楽しみ会」 12/ 2 「加世田聖母幼稚園創立50周年記念式典」 12/ 9 鹿児島市親子つどいの広場 「なかまっちファミリーコンサート」
25	7/14 キャンパス見学会 10/27 純大祭 12/ 7 親子のお楽しみクリスマス会 12/21 学内クリスマス会	9/22 「錦江湾わくわく親子クルージング」 12/ 8 鹿児島市親子つどいの広場 「なかまっちファミリーコンサート」

4. 「純大祭」への準備

「こどもバンド」は第1に「純大祭」の舞台発表に向けて活動計画を立てる。平成24年度のおよそのスケジュールを表5に示す。

表5 平成24年度のスケジュール

4月	1年生メンバー募集,担当楽器を決める(資料1-1, 資料1-2参照)。役員選出, 練習日程を決定, 連絡網の作成, 年間計画表配布, 純大祭の舞台発表のグループの振り分け, プログラム, 演奏テーマを決定。(平成20年度より, 部員が65名になり, 1ステージで狭くなったため「午前の部」, 「午後の部」の2グループに分け, 各20分ずつ2ステージの舞台発表となった。)通常の練習開始, 衣装デザイン応募。
5月	「メルヘン童謡コンサート」の練習, 「純大祭」楽譜を配布し練習開始。
6月	2年生は保育実習Ⅰ(平成24年度まで, 25年度より2月), 1年生は自主練習。「純大祭」衣装案作成, 衣装試作。
7月	「キャンパス見学会」の練習, 衣装決定, 衣装作り。
8月	2年生保育実習ⅡまたはⅢ「純大祭」役割分担表作成。
9月	2年生は幼稚園教育実習Ⅱ(平成24年度まで, 25年度より6月)衣装確認, 練習。
10月	「純大祭」毎日の早朝練習の開始。
11月以降	12月「学内クリスマス会」のほか12月のイベントに向けて練習。

5. 新しい楽器の導入

- (1) メンバーの増加や演奏機会の広がりに伴って, 先に挙げた打楽器(すず, カスタネット, タンバリン, トライアングル, シンバル, 木琴, 鉄琴, 小太鼓, 大太鼓, マラカス, クラベス)と鍵盤楽器(鍵盤ハーモニカ, アコーディオン, 電子ピアノ, ピアノ)のほか, ギロ, ウッドブロック, カバサなどのリズム楽器を加えた。また保育の現場で子どもは実際演奏しないが, 音域と音色の幅を広げるメロディー楽器としてソプラノリコーダーとアルトリコーダーを, 全体に厚みをつけるためにバスアコーディオンを補充した。
- (2) 子どもとその家族に触れ合う演奏では, 子どもも参加し, その場で一緒に音遊びや音の面白さが視覚的にも体験できるよう, ミュージックベル, ドレミパイプ¹⁰⁾などを加えた。
- (3) プログラムの選曲は, 童謡, アニメソング, ジブリ, ポップスなどのリズムカルな楽曲が中心に選曲される。プログラムに変化をつけ, 穏やかな音色の美しい, アンサンブル表現の楽しさを広げるためにトーンチャイム¹¹⁾を導入した。

＜トーンチャイムの取り組み＞

当初(平成19年)は, トーンチャイムを知るメンバーはなく馴染みの薄い楽器であった。筆者は基本的な技術, 音の出し方, 音の止め方や強弱の付け方などを指導し, あとはメンバー同士が練習を重ねていった。最初の披露は, 平成19年の「学内クリスマス会」で「ウィンター・ワンダーランド」を簡易な楽譜にアレンジし, 2年生の希望者12名による演奏であった。2年生による演奏から, 1年生の希望者も入ると徐々にメンバーの親しむ楽器となった。現在は1・2年生の希望者によるグループにおいて, やや難易度の高い楽曲を選曲し, 響きを良く聴き合いながら行うトーンチャイムアンサンブルに意欲的に取り組むようになった。

6. 学外での演奏

ここでは「なかまっちファミリーコンサート」について紹介する。

ファミリーコンサートの概要

〔日時〕 平成24年12月9日（日） 14時～15時

〔場所〕 鹿児島市親子つどいの広場 なかまっち¹²⁾

〔対象〕 子どもと家族 約80名

〔演奏〕 学生19名（1年生8名、2年生11名）が参加

楽器編成 キーボード（1）、鍵盤ハーモニカ（2）、アコーディオン（2）、リコーダー（Sop.3、Alt2）、鉄琴（1）、木琴（2）、シンバル（1）、トライアングル（1）、タンバリン（1）、マラカス（1）、すず（1）、小太鼓（1）、大太鼓（1）、 トーンチャイム

「はじめ」と「終わり」のあいさつ、曲間にアナウンスも含め、表6のような流れである。

表6 ファミリーコンサートのプログラム

流 れ	内 容
1 アンパンマンのマーチ	器楽合奏
2 となりのトトロ	器楽合奏
3 お話と大型絵本	ツリーのお話、サンタクロースの絵本
4 赤鼻のトナカイ	みんなで歌う、器楽伴奏
5 楽器紹介	楽器当て
6 ママがサンタにキッスした	トーンチャイム
7 サンタが街にやってくる	器楽合奏
8 てあそび	「とんとんトントンひげじいさん」のクリスマスバージョン
9 ミュージックベル	ドレミベル体験
10 あわてんぼうのサンタクロース	みんなで歌う、器楽伴奏

子どもと保護者も同時に楽しめるプログラムを構成し、会場も子どもに触れ合える環境が設定されている。初めに子どもにとって馴染み深い曲を2曲続けて演奏すると、音楽に合わせて歌ったり、リズムに合わせて体を揺する子どもの姿も見られた。次にクリスマスの気持ちを感じとるようなお話と大型絵本の読み聞かせを行い、この後は、クリスマスソング中心のプログラムとした。全員で歌う歌はあらかじめ歌詞が配布されてお

り、保護者も子どもに寄り添って歌い、楽器紹介では、メロディー楽器の出だしの旋律とパーカッションのリズムが鳴ると、子どもたちはほとんどの楽器名を答えることができた。トーンチャイムの演奏においては、珍しい音色に関心を示し、静かに耳を傾けた。続いて、てあそびでは、学生が手本を1度見せ、2度目に模倣して振り付け、3度目には最初から最後まで通すことができた。終盤のミュージックベルには、ほとんどの子どもが交代でこの楽器に触れて楽しみ、最後に器楽合奏とともに参加者全員で歌いプログラムを締めくくった。

このような遊びを思わせる音楽体験や、楽器の音色との出会いは、子どもにとって魅力的であり、子ども同士、音を重ね合わせることは、新しい音の発見、楽器への好奇心につながる。また学生たちは、子どもたちに色々な方法で音楽表現を考え、音楽を通して、親子との関わりを豊かにしていく有益な体験となる。

Ⅲ. 調 査

1. 対象及び方法

こども学専攻の学生を対象とし、アンケート調査を実施した。調査日は平成25年3月18日、1年生63名と2年生64名、合計127名である。回収人数は1年生62名(98.4%)、2年生62名(96.7%)、回収率は全体の97.6%であった。

2. 調査内容

調査内容は、1. 入部状況 2. 入部動機 3. 1年間参加した活動 4. 「こどもバンド」における学び 5. その他である。回答の形式は、1. ～ 4. は選択形式、5. は自由記述とした。

Ⅳ. 結果と考察

1. 入部状況

「こどもバンド」の部員と非部員の割合を図2-1、図2-2に示す。1年生63名中45名、2年生64名中52名が部員である。(入部状況のみ平成24年度4月のデータによる)平成24年度は2年生52名中、2年次に入部した者は7名(13.5%)であり、1名は1年間でやめている。45名(86.5%)は2年間所属した。

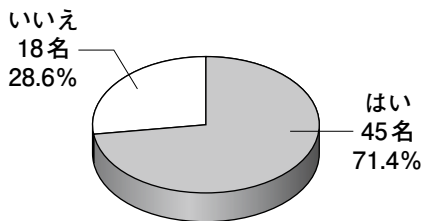


図2-1 「こどもバンド」1年生

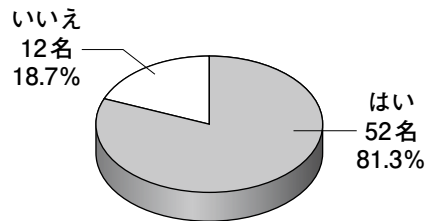


図2-2 「こどもバンド」2年生

2. 「こどもバンド」入部の動機について

「こどもバンド」入部の動機についての回答を図3に示す。回答項目は次の5つである。(複数回答) 1. 「以前に見たことがあり楽しそうだった」、2. 「もともと音楽が好き」、3. 「将来に生かせる」、4. 「音楽力の向上に役立つと思った」、5. 「その他」である。これらの中から最も多いのが、「以前に見たことがあり楽しそうだった」であり、全体の半数以上(1年生57.6%、2年生55.8%)が答えた。これは入学前に本学を訪れた際、「純大祭」、「キャンパス見学会」、「学内クリスマス会」などで「こどもバンド」の演奏を聞いたと思われる。次に約半数(1年生51.1%、2年生46.1%)が、「もともと音楽が好き」であると答えた。一方「将来に生かせる」と答えたのは、1年生26.7%、2年生11.5%、「音楽力の向上に役立つと思った」と答えたのは、1年生8.9%、2年生15.4%にすぎず、予想に反して低い数値であった。5. 「その他」の回答は、「楽しそう」、「なんとなく」、未記入が1名であった。これらの結果から、現在のメンバーは、「将

来に生かそう」という目的を持って「こどもバンド」の活動に参加するより、大半のメンバーは「楽しそうだった」という理由によるものであることが示された。

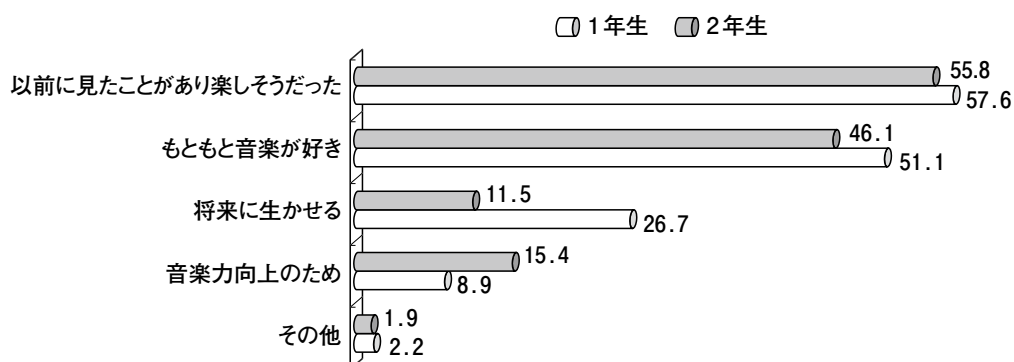


図3 「こどもバンド」入部動機 (%) (複数回答)

3. 1年間の演奏状況

平成24年度の「こどもバンド」の演奏状況を学内と学外別にし、表7に示す。

表7 平成24年度「こどもバンド」の演奏状況

学内	演奏名	キャンパス見学会 オープニング	純大祭	親子のお楽しみ クリスマス会	学内クリスマス会
	月日	7/15	10/28	12/1	12/22
	場所	大講義室	大講義室	音楽室	体育館
	出演人数	77名	97名	48名	88名
学外	演奏名	こどもの日メルヘン 童謡コンサート	お楽しみ会	加世田聖母幼稚園 創立50周年記念	なかまっちファミリー コンサート
	月日	5/5	11/16	12/2	12/9
	場所	かごしまメルヘン館	八幡幼稚園	南さつま市民会館	鹿児島市親子 つどいの広場
	出演人数	21名	12名	25名	19名

表7に示すとおり、学内は、「キャンパス見学会」、「純大祭」、「親子のお楽しみクリスマス会」、「学内クリスマス会」と4回、学外は、「こどもの日メルヘン童謡コンサート」、「お楽しみ会」、「加世田聖母幼稚園50周年記念式典」、「なかまっちファミリーコンサート」の4回を合わせて8回あった。この中で、「親子のお楽しみクリスマス会」、「こどもの日メルヘン童謡コンサート」、「加世田聖母幼稚園50周年記念式典」、「なかまっちファミリーコンサート」は子どもと親子に触れ合うイベントであり、「八幡幼稚園お楽しみ会」、「なかまっちファミリーコンサート」は保育の現場での演奏であった。8回のイベントの中で学内は、「純大祭」で97名（1・2年生全員）が演奏に出演した。学外のイベントの依頼は、おおよそ20名前後の出演であり、「加世田聖母幼稚園創立50周年記念式典」の南さつま市民会館における25名の演奏は、平成24年度では最も大

きなイベントであった。また8回のうち4回は12月の演奏であり、そのうち3回はクリスマスの集いであった。

図4はメンバーの演奏参加状況を「学内のみ」、「学内と学外」、「すべて」の3項目に大別して表したものである。2年生は約半数（55.8%）が学内のみ、半数近く（40.4%）が学外も含めて参加しており、双方は多少の有意差に留まったのに対して、1年生はおよそ4分の3（73.4%）が学内のみの演奏に参加し、この約3分の1（22.2%）が学内と学外に参加している。すべてのイベント8回に参加した学生は1年生2名（4.4%）、2年生2名（3.8%）であった。

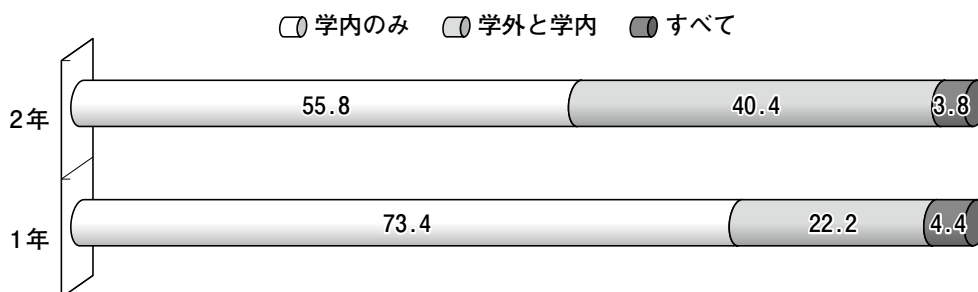


図4 演奏参加状況概略図 (%)

表8は表7の平成24年度「こどもバンド」の演奏参加状況の内実を5項目に大別して表した。最も多い演奏参加は、「学内1～3回」で、1年生は22名（48.9%）、2年生は22名（42.3%）であった。次に多かったのは「学内すべて4回」参加で、1年生11名（24.4%）、2年生7名（13.5%）であった。「学内と学外複数回」参加している学生は、1年生は9名（20.0%）、2年生は17名（32.7%）であった。「学内と学外1回」は1年生1名（2.2%）、2年生4名（7.7%）であり、すべての演奏に参加した学生は、1年生2名（4.4%）、2年生2名（3.8%）であった。既述のようにこれらの結果から見てくることは、1年生は、学内の活動のみが73.4%で圧倒的多く、2年生は学内のみ（55.8%）と学内と学外（44.2%）の比率はほぼ似通った数値であらわれた。即ち、1年生は約4分の1のメンバーが、2年生は約半数のメンバーが学外の活動にも参加した。

表8 「こどもバンド」の演奏参加状況の内実

	1年 n = 45		2年 n = 52	
	人数	%	人数	%
学内1～3回	22	48.9	22	42.3
学内すべて4回	11	24.5	7	13.5
学内と学外複数回	9	20.0	17	32.7
学内と学外1回	1	2.2	4	7.7
学内と学外すべて	2	4.4	2	3.8

4. 「こどもバンド」における学生の学び

「こどもバンド」における学生の学びを、表9の学生の自己評価によって表し検討した。9つの質問項目は、課外活動や器楽アンサンブルが育む協調性、自主性、創造性および子どもの音楽活動に求められる要素である。全体の項目において、「やや低下した」、「低下した」の「低下群」が1・2年生とも0%であったので、低下群を削除し、「向上した」、「やや向上した」「どちらともいえない」の3尺度にまとめた。図5-1、図5-2は9項目に対する自己評価の結果を1年生と2年生に分けて示したものである。

次に項目別に分析し考察を行った。

「向上した」「やや向上した」の「向上」群を項目別に見ると、1年生は、「練習成果を表現する楽しさ」(97.8%),「共感する喜び」(95.6%),「音楽活動についての関心が深まった」(91.1%)の3項目について9割以上の学生が「向上した」と答えている。2年生は、「練習成果を発表する力」(96.2%),「練習成果を表現する楽しさ」(92.3%),「共感する喜び」(90.4%) 3項目について9割以上の学生が「向上した」と答えている。

1年生の「練習成果を表現する楽しさ」がこの調査で最も高い数値(97.8%)が得られたのは、音楽経験の有無にかかわらず、学内外における演奏を通して、音楽特有の楽しさを1年間体験し、音楽活動に対する親しみや新鮮さを享受したと考えられる。2年生が「練習成果を発表する力」(96.2%)が高いのは、2年間の練習の積み重ねの経験が自信につながったと考える。1・2年生とも「練習成果を表現する楽しさ」が有意に高くなることが認められた。さらに両者とも「共感する喜び」が高いのは音楽本来のねらいに到達するものであり、「こどもバンド」は学生の音楽観を生かし、音楽力を育む活動であると言えよう。

一方、2年生は「独自のものを創り出そうという意欲」(65.4%),「問題を解決する力や乗り越える力」(68.8%),「粘り強く取り組もうとする意欲」(78.9%)が、同様に1年生も「独自のものを創り出そうという意欲」(64.5%),「粘り強く取り組もうとする意欲」(73.4%)「問題を解決する力や乗り越える力」(73.3%)が全体から見ると低い。言い換えると、この3項目においては「変わらない」という回答が他より高い(20%~30%代)結果となった。これらの中でも「独創性」について1・2年生とも60%代の回答に留まった。しかし、「問題を解決する力や乗り越える力」は2年生(68.8%)より1年生(73.3%)の方に5.5%向上群が多く示された。このような結果からは、メンバー個々人の参加意欲が異なること、また1年間の活動のみ、あるいは1回の調査のみでその向上性は認められないが、興味深い結果である。1年生が課外活動としての「こどもバンド」を積極的な気持ちで捉えていると考えることができ、これからの活動と人間の成長に関与することとして期待したいと思う。

今回のアンケート調査の結果、「こどもバンド」における学生の学びについての自己評価の回答は、全体的に向上群が高いことが示された。保育者を目指す学生が、器楽合奏や音楽活動の楽しみ、喜び、達成感を体験し、前向きになることによって驚くほど進歩を遂げる可能性を秘めていると捉えられるのである。

これに対し、創造的な表現、さらに工夫してやってみようという意欲や、粘り強さ、及び困難なことに挑戦して達成できた充実感、さらに本当の意味での問題を乗り越える力の向上性については、この後の課題として受けとめたい。

表9 「こどもバンド」における学生の自己評価

質問項目 (キーワード)		向上した		やや向上した		変わらない		やや低下した	低下した
		1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年2年	
1. 自分から取り組む意欲 (自主性, やる気, 挑戦心)	人数	10	18	30	27	5	7	0	0
	%	22.2	34.6	66.7	51.9	11.1	13.5	0	0
2. 仲間と協力して取り組む意欲 (協調性, リーダー性)	人数	17	30	20	15	8	7	0	0
	%	37.8	57.7	44.4	28.8	17.8	13.5	0	0
3. 粘り強く取り組もうとする意欲	人数	8	20	25	21	12	11	0	0
	%	17.8	38.5	55.6	40.4	26.6	21.1	0	0
4. 独自のものを創り出そうという意欲 (独創性)	人数	7	14	22	20	16	18	0	0
	%	15.6	26.9	48.9	38.5	35.5	34.6	0	0
5. 共感する喜び	人数	30	34	13	13	2	5	0	0
	%	66.7	65.4	28.9	25.0	4.4	9.6	0	0
6. 問題を解決する力や乗り越える力	人数	10	19	23	22	12	11	0	0
	%	22.2	26.5	51.1	42.3	26.7	21.2	0	0
7. 練習成果を発表する力	人数	18	34	21	16	6	2	0	0
	%	40.0	65.4	46.7	30.8	13.3	3.8	0	0
8. 練習成果を表現する楽しさ発揮する喜び	人数	22	37	22	11	1	4	0	0
	%	48.9	71.2	48.9	21.1	2.2	7.7	0	0
9. 音楽活動についての関心が深まったか	人数	18	30	23	15	4	7	0	0
	%	40.0	57.7	51.1	28.9	8.9	13.4	0	0

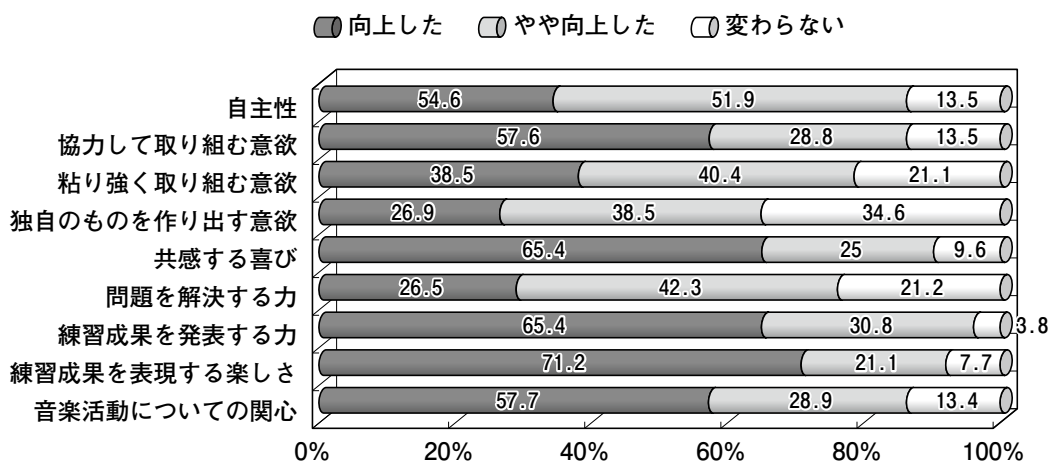


図5-1 自己評価2年生

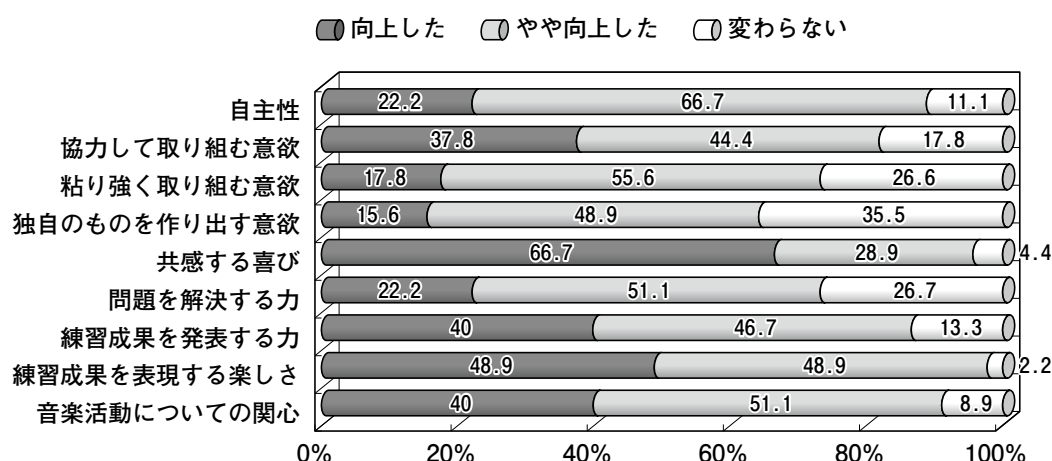


図5-2 自己評価1年生

5. 自由記述

最後にメンバーの自由記述を取り上げる。未記入のものも多かったため全体的に回答は少ないが、以下の設問(1)～(4)より、共通内容を集約して項目に分け表記した。

- (1) こどもバンドの活動で良かった点、楽しかった点
- (2) こどもバンドの活動で良くなかった点、辛かった点
- (3) この1年間で一番思い出に残ったこと
- (4) その他、意見、希望など

表10-1 (1)良かった点、楽しかった点 (人)

みんなと一緒に練習する楽しみ	22
みんなで協力し一つのものを作りあげる達成感	19
発表する目標に向かってみんなで頑張った	18
行事に向けてみんながまとまっていく	9
音楽を通して心を通わせる	8
みんなをまとめる力となった	4
音楽が完成したときの感動がたまらない	1
先輩・後輩・同級生と仲良くなれた	29
子どもと触れ合えた	12

(1)の設問の回答の多くは、仲間と一緒に演奏する楽しさと、協力して一つのものを作り上げる達成感を得たこと、目標や行事に向けて全体がまとまっていく充実感を味わったことを表している。「みんなをまとめる力」となったという記述も含め「みんな」で練習し、協力し、頑張ったという過程の中で、メンバーたちが互いに関わり学び合いながら、協力を高めていき、アンサンブルとして音楽ができあがったときの共感、共有を楽しむ場が実現されたのである。

この喜びと達成感、一体感が「音楽が完成したときの感動がたまらない」という記述に表れているのではないだろうか。また自由記述の中で最も多かったのは「先輩・後輩、同級生と仲良くなれた」という回答であった。1・2年生相互の交流の場は通常ほとんどないため、「こどもバンド」を通して出会いがあり、相互に関わり合うことができたようである。この点については「こどもバンド」の紹介で、資料1-1に謳われている。

表10-2 (2)良くなかった点, 辛かった点 (人)

朝の練習が辛かった	27
早朝の電車がいない	6
連絡が行き届かないことがある	15
練習日程が決まらない	4
充実した練習時間となっていない	8
遅刻・欠席をした	9
練習意欲に差がある	16
授業の課題との両立が難しい	5
朝以外の練習時間を合わせることに	10
思い通りに練習時間が取れない	3
ピリピリしたこと	2

られる。練習意欲については、学生自らの自主性による入部とは言え、参加・活動意欲に個人差が大きいのは否めない。そのため、人間関係に摩擦が生じたことも少数だが表れている。イベント前の連日の早朝練習が、メンバーにとって「辛い」という思いが如実に表れているが、早朝練習の辛さを克服していけるかについては、個々人の意識と仲間の意識を高めていくことに期待したいと思う。日頃から短い時間で充実した練習方法の取り組みを工夫し、メンバー相互の協力、連携を高めていくこと、その他、授業と課外活動をバランスよく両立させることも課題として注意する必要がある。

表10-3 (3)一番思い出に残ったこと (人)

純大祭	32
学内クリスマス会	18
トーンチャイムが演奏できたこと	20
衣装を作って発表した	8
色々な場で演奏したこと	6
自分の思いが聴いている人、見ている人に伝わる	2
指揮やマイクをしたこと	2

曲として仕上がらない。それゆえ全体の練習に影響するため皆で話し合い、このグループのメンバーたちは練習を最優先して集まる姿が見られた。トーンチャイムの演奏は、発表の場を重ねるごとに上達し、ハーモニー作りと魅力ある音色を楽しみ、表現方法と練習成果を発表する

表10-4 (4)その他, 意見, 希望など (人)

朝練習より放課後の練習にして欲しい	3
ゆとりを持って計画的に練習したい	6
これからも続けて	4
練習が大変なこともあったが、すべてが有意義で、自分が成長することのできる経験ばかりであった。	1

(2)の設問で顕著な記述は「朝の練習が辛かった」ことであるが、これらの回答には公共の交通機関が制約されるメンバーの回答も含まれると考える。練習時間に関する記述について補足すると、現在こども学専攻は、1年生2クラス、2年生2クラス合わせて4クラスあり、全クラスが共通の空き時間がないため、「思い通りに練習時間が取れない」のである。そのため、急な練習時間が入るときは、早朝(8時10分～8時50分)または放課後に限られる。次に「遅刻・欠席をした」メンバーの自覚とこれに関連して「練習意欲に差がある」という記述が見

(3)の回答から「純大祭」の舞台発表は1・2年生とも全員が出演し、「こどもバンド」の中心となる活動であり、4月から長い時間をかけて準備と練習を積み、1年間あるいは2年間のクライマックスとなる発表であったことが表れている。次に「トーンチャイムの演奏ができたこと」という回答が多く見られた。トーンチャイムは一人でも欠けると旋律が抜け、ハーモニーが成り立たず、

意欲や仲間意識、協調性を高めた。そのほか、少数の記述だが一人ひとりの存在が、全体の演奏をまとめ高めていったことを示すものであろう。

(4)の「その他, 意見, 希望など」の回答はさらに少人数の記述であったが、練習時

間の変更希望,「放課後にすると集まりも良くなるのではないか」という提案,「ゆとりを持って計画的な練習をしたい」という前向きな意見のほか,「すべてが有意義で,自分を成長させる経験ばかりであった」という記述は意義深いものである。

V. 結 び

本稿では,「こどもバンド」の起りから出発し,簡単な概要と決して十分なものではないが,活動経過の報告をした。「こどもバンド」における学びについて,学生のアンケート調査の結果から,「音楽を楽しむ」ことに一定の成果が浮かび上がったと言える。繰り返すことになるが,「こどもバンド」は,将来,保育の現場に応じた音楽活動を指導する実践力を培うための,音楽アンサンブルグループであり,そのために,保育者となる学生自身が,「音楽する」喜びを体験し,音楽経験の様々なメンバーの個性を生かし,アンサンブル学習を楽しむという視点を筆者らは大切にしてきた。加えて自主的に参加する課外活動であることをあらためて強調したい。

このように見てくるとき,「こどもバンド」は単に器楽合奏を楽しみ,発表する姿としてではなく,一曲,あるいは演奏のプログラムが仕上がって行く過程において様々なできごと,問題点に出会い,他者との関係(楽譜の準備,練習や演奏のための環境の準備,パート別練習,練習日程の連絡,楽器の搬出搬入など)を含めて多くの要素が絡み合いながら,リーダー,サブリーダー,パートリーダーへの協力や部員同士の理解,連携を高めていく姿であると言えるであろう。言いかえると学生たちが互に関わり学び合い,時間をかけて音楽が出来上がっていき,「共感」の喜びと達成感を共有するところにおいて「こどもバンド」の姿が存在すると考える。そのような中で,対人関係能力や社会性が育まれることにもつながっていくであろう。

音楽室から流れてくる「こどもバンド」のパート練習や全体練習の音が,次第に曲として仕上がり,音楽アンサンブルの潜在的な力を発揮する。また「自主的参加」から「主体的な活動」と言う行為になり,授業では到達できないレベルの演奏へと達するようになる。

年月を経て,演奏発表の機会が増え,大所帯となった「こどもバンド」の活動において短い2年間で,アンサンブルという方法で高めた音楽表現力や人間力を,子どもの音楽活動や保育にどのくらい連動していけるか,現実として無関係ではないことは言うまでもない。

授業でもなく,クラブ活動でもない課外活動として,手探りの中から「こどもバンド」が生み出され,並々ならぬ情熱的な音楽指導と,これに触発された1期生のメンバーたちが築いたuniqueな課外活動が引き継がれ成長してきた。今後も「未来は子どもの手の中に…WE LOVE KIDS!」と宣言する学生たちが,愛情をもって子どもたちの未来を支え,地域社会に貢献する保育者として巣立っていく一助となるよう,支援と指導力の向上を図っていきたいと思う。

最後に,「こどもバンド」が学内で支えられながら,活動が学外へ広がるにあたり,演奏参加の機会を与えてくださいました園や施設,地域の関係の方々に感謝を申し上げます。



写真1

鹿児島市親子つどいの広場なかまっちファミリーコンサート

2011 (平成23) 年12月11日



写真2

かごしまメルヘン館こどもの日童謡コンサート

2012 (平成24) 年5月5日



写真3

錦江湾わくわく親子クルージング

2013 (平成25) 年9月22日

資料1-1 教員から新入生へ

「こどもバンド」について

2013/04/04

「こどもバンド」とは、こども学専攻の学生を対象とした（授業でも部活動でもない）課外活動です。主に幼稚園や保育園で使われている楽器などをを用いて器楽合奏を楽しむ、舞台演奏、演出法など自主的に学び合い、学内発表の経験を通して将来の仕事に生かそうとするものです。近年は学外からの演奏依頼に応え、地域交流となる活動も行っています。平成24年度は1年生2年生合わせて90名ほどのメンバーがいいます。

今年度も1年生のメンバーを募集します。

【活動内容】

- リーダー 2年 黒田ともみ
- サブリーダー 2年 申間 咲希
- 練習 通常 週1回（8時10分～8時45分）
発表前の期間は集中練習を行います。
- 発表 1. 純大祭 コースごとの舞台発表として
2. 学内クリスマス会、親子のお楽しみクリスマス会
3. 学外活動：鹿児島市親子つどいの広場なかまっち
- 楽器 ピアノ、キーボード、アコーデオンの、鉄琴、木琴、鍵盤ハーモニカ、大太鼓、小太鼓、シンバル、すず、ギロ、カステタネット、タンブリン、リコーダー、マラカス、ウッドブロック、シェーカー、トライアングル、トーンチャイム、ミュージックペダルなど

♪【第1回ミーティング】

日時 4月10日 水曜日 8時10分
場所 27-606号室（音楽室）

この日に、1・2年生の顔合わせをしますので必ず参加してください。

「こどもバンド」は普段、交流の少ない2年生とも親しくなり、いっしょに音楽アンサンブルができる唯一の機会です。授業とは違った貴重な学びや楽しみなどが体験できます。欠席、遅刻をしないややる気のある人を希望します。音楽経験の有無は問いません。多数の参加をお待ちしています。

顧問 鶴巻保子

問い合わせ 音楽研究室（27-702）まで

資料1-2 リーダーから新入生へ

「こどもバンド」について

2013/04/03

★今年の年間行事は次のとおりです。

7月	キャンパス見学会
10月	純大祭
	親子おたのしみクリスマス会
12月	なかまっち
	学内クリスマス会



2012 純大祭

※多少の変更や急な依頼があるかもしれません。

・名前 (C1 -)

・TEL

・アドレス

・音楽経験がある人は楽器名を書いてください (ex ピアノ、クラリネット)

・中学、高校での部活動名を書いてください。

・入部したら何の楽器をしたいですか？

下の楽器の中から第3希望まで選んで書いてください

鍵盤ハーモニカ・リコーダー・アコーデオンの・ピアノ・キーボード・木琴・鉄琴・小太鼓・大太鼓・シンバル・小物楽器（タンブリン・トライアングル・カステタネットなど）	第1希望
	第2希望
	第3希望

※締め切り：4/5金16：30までに（27-702）音楽研究室前BOXに提出して下さい。

注)

- 1) 日常的に「おもしろい」「変わった」という意味に捉えられるが、本稿では「独創的な」「独自の」「唯一の」「無比の」という本来の意味を損なわないよう、あえて日本語訳しない。
- 2) 本稿では、保育士及び幼稚園教諭を意味する。
- 3) 平成20年3月、「保育所保育指針」の改定を受けて、平成23年度入学生より実施している。
- 4) 平成22年度までの科目の名称である。前述平成23年度より、次のように変更された。音楽Ⅰ（保育の表現技術・音楽）音楽Ⅱ（ピアノ技法）、音楽Ⅲ（選択）
- 5) 関間豊吉『音楽科教育学概論』音楽之友社、1985年、141-142頁を参照。
「音楽表現は人間精神の内なるものの表出と、音楽作品への共感によってなされる自己表現の活動である。これによって精神を開放し、自己発展への道をたどる時、器楽は重要な意義をもつ」これは器楽の特性によるところが大きいとする。
- 6) 「幼稚園教育要領〈表現〉」、「保育所保育指針〈表現〉」を参照。
- 7) 平成20年は鹿児島純心女子高校、平成21年より一般高校、平成22年より第1回キャンパス見学会のオープニングである。
- 8) 「江角学びの交流センター」（こどもの未来支援室）の活動として、主に「純心こども講座」に参加した親子の方々を対象とした行事で、約30組（約80名）前後の参加者である。
- 9) 「純大祭」の日付は、舞台発表の日を表記した。平成14年～18年の「純大祭」と「学内クリスマス会」は以下のとおりである。
「純大祭」…平成14年10/27、15年10/26、16年10/31、17年10/23、18年10/29
「学内クリスマス会」…平成14年12/21、15年12/23、16年12/22、17年12/23、18年12/23
平成22年5月1日の本学「創立50周年記念国民読書記念読書フェア」および12月8日本学「創立50周年記念祝賀会」は、本学主催であるが会場は「かごしま県民交流センター」および「城山観光ホテル」であったので、学外の欄に表記した。
- 10) 知育楽器や教育楽器として幼稚園や保育園で使われている。
- 11) 中村ますみ「音楽療法場面におけるトーンチャイムの有効的な活用法」『鹿児島国際大学短期大学部研究紀要』第81・82号、2009年、123-124頁を参照。「金属製の筒状の形で1本1本音高が異なることから＜鉄琴をばらしたもの＞と表現する者もいる……楽器演奏上の特性はハンドベルと同様であり、……音色はセラピューティックtherapeuticと言っても良いであろう」。
- 12) 鹿児島市「親子支援センター」の愛称である。卒業生からの依頼により、平成21年度から12月第2日曜日に演奏させていただいている。